

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	北海道大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	新・自然史科学創成		
中核となる専攻等名	理学研究科地球惑星科学専攻		
事業推進担当者	(リ-ダ-) 岡田 尚武 外19名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>人類が生存する地球表層圏の多様性と進化を包括的に理解するための研究拠点を形成する。博物学から分化発展した地球科学と生物分類・進化学の2大領域を現代的な視点から統合し、新しい学問領域である「新・自然史科学」を創成する。特に物質循環の視点を取り入れ世界に類を見ない新しい自然史科学のCOEを築く。恵まれた研究教育環境のもとで国際的な自然分類学者を養成し、広く世界に貢献する。地球-生命相互作用プログラムを設定し、「国際統合深海掘削計画」、「地球規模分類学計画」などの国際研究計画と密接に関連させて研究教育を推進する。本学が推進する学院、研究院構想に即して「新・自然史科学」の大学院コースや大学院留学生特別コースを新設する。多様性データベースの管理システムを大学博物館に確立させ、「自然分類センター」の礎を構築する。大学総合博物館を活用し市民を対象にした準自然分類学者の養成を実施する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>本大学が全国でも有数の研究者群を有する地球科学と生物分類・進化学の2大領域を融合し、物質循環に着目して、新しい自然史科学を創成しようとする拠点構想であり、事業推進担当者等が中心的な役割を演ずる国際統合深海掘削計画等の国際的な研究計画と密接に連動した計画として評価される。大学総合博物館を活用し、市民を対象とした準自然分類学者の養成をするなど特徴的な企画をもっている。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	北海道大学	整理番号	J - 3
拠点のプログラム名称	スラブ・ユーラシア学の構築		
中核となる専攻等名	スラブ研究センター		
事業推進担当者	(リダー)家田 修 外19名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点形成プログラムはスラブ研究センターが培ってきた世界的研究拠点としての実績を踏まえつつ、地域研究を開放性や相関性の方向で刷新し、スラブ・ユーラシア全域（旧ソ連東欧地域）、ひいてはユーラシア全体に関する新たな認識の枠組みを提示する。即ち本プログラムは世界に先駆けてスラブ・ユーラシア学という新領域の学問形成を目指す。そこでの新たな分析概念は中域圏である。つまり、スラブ・ユーラシア内の各地域は地球化の中で隣接外部世界から引っ張られ（遠心力）、極東シベリア、中央ユーラシア、中・東欧などの中域圏が生まれた。各中域圏では内外境界の流動化と共に、民族や資源をめぐる様々な軋轢が生まれた。今日のスラブ・ユーラシアは旧社会主義圏としての求心力と外部世界からの遠心力がせめぎあう、中域圏のゆるやかな束として理解される。ところが世界的な研究の動向はこの現実とは逆に、地域細分化傾向にある。本プログラムでは中域圏を隣接地域と旧共産圏との相互関連の中で比較分析し、スラブ・ユーラシアの全体像を描き出す。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>スラブ・ユーラシア地域を対象とする学際的研究の蓄積を基盤に、「中域圏」というあらたな分析概念によってこの地域全体の理解を目指す意欲的な拠点である。また地域相互の関係性を重視する「中域圏」概念を導入することは、研究の細分化を克服することによって、新たな地域研究の方向性を開拓し発信することが期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	筑波大学	整理番号	J - 3
拠点のプログラム名称	こころを解明する感性科学の推進		
中核となる専攻等名	人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 榎 正幸 外25名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点は、医学、心理学、芸術学を架橋・融合した「感性科学」分野を創成し、ヒトのこころの働きを、分子細胞神経科学、システム脳科学、認知・行動神経科学、精神機能障害学、感性情報学の視点から分野横断的に研究することにより、「感性」を生み出す脳機能の総合的な理解を目指すものである。この教育・研究を通して、「感性科学」の融合的研究を実行する若手研究者と、この分野の成果を社会に還元する人材の育成が期待できる。今後、より深化した人間の理解に向けて、感性的アプローチが不可欠であるが、感性の働きは未だ自然科学的には殆ど解明されておらず、直感的に捉えられてきた「感性」機能を、多角的な脳科学的研究方法を用いて顕在化させることが求められている。本拠点形成は、動的脳機能の解明のみならず、人の感性反応に適合した人間志向型製品の創出や、現代人のこころの諸問題解決への糸口の発見までを視野に入れた、感性科学の推進を計画している。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>「感性」という、近代科学では扱いにくい領域に積極的に挑戦し、医学、心理学、芸術学、心身障害学など諸分野よりの統合的なアプローチによる学際的な拠点計画である。本提案は、今までの各分野の事業推進担当者の研究実績を踏まえ、さらに一層の展開をはかり、「感性科学」という新しい学問の樹立を目指すものであり、成果が期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	東京大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	生物多様性・生態系再生研究拠点		
中核となる専攻等名	農学生命科学研究科生圏システム学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 鷲谷 いづみ 外17名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点は、森林、農地、海洋等の自然資源の利用・管理にかかわる農学生命科学および海洋科学の諸分野を縦系に、生物多様性・生態系の維持・保全という新たな社会的課題に寄与すべく発展しつつある環境情報学、保全生態学、保全遺伝学、環境修復学を横系に、環境の世紀にふさわしい新たな科学と技術の体系を編みだすことを目的とする。本拠点では、総合的・俯瞰的視野をもった研究者と実務者の養成を重視し、国際的な教育・研究・情報交流を推進する。日本を含むアジアの森林 - 草原、海域 - 陸水域 - 陸域などの移行帯を共通の現場とし、遺伝子・種・生態系の多様性、土壌・底質 - 植物系から広域的な生態系の構造・機能複合としての景観まで、生物多様性・生態系再生の計画、実践、評価を視野に入れた研究・教育活動を展開する。また、研究成果を反映させた協働プログラムの立案や実施を通じて市民、NPO、企業、行政等と連携し、広範な市民による社会的評価を受けつつ研究・活動を展開する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>目的志向型で、高い研究水準に基づき、しっかり構想された拠点形成計画となっている。生物多様性・生態系再生を目指す上で、社会との連携が不可欠なことから、本計画により、一層の学際的な取り組みが進められることになり、日本およびアジアにおける自然再生への貢献が期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	東京大学	整理番号	J - 3
拠点のプログラム名称	心とことば 進化認知科学的展開		
中核となる専攻等名	総合文化研究科言語情報科学専攻		
事業推進担当者	(リダー)長谷川 寿一 外20名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>「人間とは何か」という人文科学の主題に対し、近年、自然科学からのアプローチが急速に新しい光を投げ掛けるようになってきた。本プログラムでは、人間性の核心をなす「心とことば」に焦点をあて、認知科学、言語科学、進化人類学/進化心理学、遺伝学、小児科学、情報科学等の連携による学際融合研究を行う。「普遍性と多様性(固有性)」をキーワードに、「心とことば」の「機構」「機能」「発達」「進化」について、総合的理解を深め、21世紀型の人間統合科学の構築を目指す。本プログラムによって、言語、利他性、攻撃性、他者理解能力などの心理メカニズムと生物学的基盤が明らかになると期待されると同時に、研究成果を社会に還元することによって、グローバル化が進む現代社会における人間理解の知的基盤を提供できるだろう。事業面では、大学院生、若手研究者の育成を最重点課題とし、国際交流、異分野交流を通して、巨視的、複眼的発想ができる研究者を養成する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>「人間とは何か」という主題の解決のため、「心とことば」に焦点を当てて、認知科学、言語科学、進化人類学、進化心理学、遺伝学、小児科学、情報科学などの観点から多角的かつ学際的に迫ろうとする拠点計画である。これまで蓄えられてきた成果を十分に活かすことによって、学際・複合的な世界水準の研究拠点が形成されるものと期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	東京工業大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	大規模知識資源の体系化と活用基盤構築		
中核となる専攻等名	情報理工学研究科計算工学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 古井 貞熙 外18名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>21世紀は知識資源の時代と言われており、あらゆる分野の研究・教育・生活において、大規模知識資源の構築と活用が不可欠になる。これまでに種々の個別知識データが構築されてきたが、個人、研究機関、研究分野に分散しており、統一された概念のもとで開発されていないため、管理・拡張・活用が容易でない。本研究拠点では、大規模知識資源の標準的な体系化、構造化と、活用技術を含む知識の構築を実現する。具体的な知識資源としては、話し言葉、自然言語、遠隔教育資源、古典文献、歴史文書、マルチメディア教材などを対象とし、大規模知識資源の構築技術、検索技術、データマイニング技術、ネットワーク技術、並列計算技術などを研究する。これにより、誰でも容易に知識資源を構築し、体系的に活用することが可能になり、既存学術の一層の発展と新しい学術の開拓が可能になる。これらの研究を通じて、知識資源の体系化と活用に関する知識を身につけた、若手知識資源研究者を育成する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>本拠点は情報、認知、言語、文化財、教育等の学際的な構成員からなり、総じて優れた実績を有しているが、とくに拠点リーダーの卓越した構想力とリーダーシップは高く評価できる。目標とする研究開発は、様々な学問分野発展の基盤となるものであり、その実現が切望される。また、その研究教育計画は着実に説得力に富み、この分野の世界的な拠点となることが期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	お茶の水女子大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	ジェンダー研究のフロンティア		
中核となる専攻等名	ジェンダー研究センター		
事業推進担当者	(リダー) 戒能 民江 外15名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点は日本社会、国際社会が抱えるさまざまな課題に対し、ジェンダーの視点からの解明を行い、日本における男女共同参画社会の実現のみならず、アジアから発信し、世界のジェンダー研究・教育に資する「ジェンダー研究のフロンティア」形成を目的とする。具体的には少子・高齢社会の到来、性に関わる人権侵害、生殖・医療技術の急速な展開と法的・社会的対応の遅れ、メディア・リテラシーの未成熟など日本社会に顕著な問題のみならず、世界的な経済格差の拡大、文化原理主義の台頭による自由の抑圧、紛争下での暴力等に伴うジェンダー問題を扱う。本拠点は「政策と公正」「少子化とエコノミー」「身体と科学・医療・技術」「理論構築と文化表象」の4班で編成し、社会/文化分析、理論追究をふまえた政策化への新たな知見を提示し、女 家族 地域 国家 のグローバルな再構築、および次世代のジェンダー研究教育、男女共同参画社会の担い手の育成という成果をもたらす。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>ジェンダー研究を学際的に推進するという目的が明確で、しかもこれまでの研究および教育上の貢献も高く評価できる。国際的な協力、研究・教育面での情報や成果を共有するための発信能力、若手研究者の育成計画も意欲的に計画されており、世界的な拠点、とくにアジアにおけるジェンダー研究の拠点として、今後、十分な「フロンティア」性を発揮されることが期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	長岡技術科学大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	グリーンエネルギー革命による環境再生		
中核となる専攻等名	工学研究科エネルギー・環境工学専攻		
事業推進担当者	(リダー)原田 秀樹 外17名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>21世紀に突入した今、人類はさまざまな地球環境の難問に直面している。健全で持続可能な地球に再生するためには、化石エネルギー依存から脱却し、新たなエネルギー創生と物質循環・物質創製のための「緑のエネルギー革命」を強力に推進していく必要がある。「グリーンエネルギー革命による環境再生」では、本学の傑出した研究業績を有する三つの研究グループ(バイオマスエネルギー、燃料電池・光触媒、微生物分解・バイオレメディエーション)が結集して、次世代の環境低負荷型のエネルギー創生と物質循環・物質創製による「緑のエネルギー革命」を世界規模で推進していく人材育成のための国際研究教育拠点を形成する。具体的には、廃棄物・廃水、未利用有機性資源からメタン、水素、アルコールを高速・高効率で生産し、直結型燃料電池に繋げるエネルギー創生グループと、難分解性物質の微生物浄化とその過程から生成するバイオ資源から高機能なバイオポリマーを創製する物質循環グループ、の二大研究グループから成る学際的横断的研究組織を構成する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>研究には特色があり、またリーダーの意欲は高く、さらに大学全体としての支援策も十分なされており評価できる。海外拠点との連携に関する構想を大いに進め、途上国が持続的社会的形成を目指して行く上での具体的な手法を提示できる世界的研究拠点となることが期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	富山医科薬科大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	東洋の知に立脚した個の医療の創生		
中核となる専攻等名	医学系研究科生化学系専攻		
事業推進担当者	(リダー) 寺澤 捷年 外12名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>「東洋の知」は、人間存在を自然の中で生かされている心身一如の小宇宙として捉えている点で優れている。本プログラムは、西洋医学的に同一の疾患カテゴリーの中に多様性が存在することを、「東洋の知」の切り口で捉え、これを最新の技術を導入して遺伝子及びタンパク質のレベルで明らかにし、病態の個別性や個人差に基づく「個の医療」を創生しようとするものである。さらに伝統医薬に関する基盤研究を遂行し、資源の確保や永続的利用を可能にする方策を提示するとともに、薬物治療学の新たな展開を目指す。本研究を実行するためには、医学系研究科に所属する東洋医学の臨床研究者、西洋医学の臨床研究者、薬学研究科に所属する基礎研究者の緊密な関係が必要である。拠点リーダーの強いリーダーシップの下に、和漢薬研究所を機軸として合同研究チームを形成し、明確な目標に向かって若手研究者の育成に全力を挙げる体制を構築する。また、国内にとどまらず、中国など海外の人材育成をも視野に入れその拠点を形成するものである。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>研究者個人の研究実績と高いポテンシャルが評価できる。大学としても当該分野のパイオニアのひとつであり、ユニークな存在として認められてきた。今回のプログラムはそれを一歩更に踏み出し、和・漢医療の客観化と充実を一層企るとともに、和・漢・洋の医の融合も視野に入れたものである。拠点形成の内容においてユニークかつ優れたものが多く、計画と目的において世界水準を達成し得るものと期待する。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	北陸先端科学技術大学院大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	知識科学に基づく科学技術の創造と実践		
中核となる専攻等名	知識科学研究科知識システム基礎学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 中森 義輝 外19名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>資源に乏しく科学技術創造立国を目指す日本にとって、科学技術を生み出す「知」こそが価値のある限りない資源であり、「知」を持続的かつ組織的に創造する方法の理論化と実践が必要である。本プログラムでは、科学技術研究の戦略企画立案に関わる「知識創造理論研究」と、その理論を先端科学技術研究の現場で実践し理論研究にフィードバックする「知識創造実践研究」を各研究科から選抜された教官によって組織される研究科横断型新専攻「科学知識創造学専攻」において実施する。教育面では、幅広い見識を持ち創造研究活動を支援できる人材である「知のコーディネーター」と知識創造理論を理解した将来を見通せる先端科学技術研究者である「知のクリエイター」を学内の優秀な院生、企業等経験者から選抜した上で育成する。このシステムにより科学知識が持続的に創造されれば、重点研究領域の設定や推進方法についての先進的モデルを提供できると考えている。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>これまで経営学系分野などにおいて実践によって成果を挙げてきた知識科学の知見を材料科学分野をはじめ多くの先端科学技術研究の場に適用し、「知」を組織的に創造する方法論へと発展させて、理論化に役立terるといふ研究はユニークであり、これからの人材育成の点で期待できる拠点計画である。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	名古屋大学	整理番号	J - 2
拠点のプログラム名称	同位体が拓く未来		
中核となる専攻等名	工学研究科原子核工学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 山本 一良 外17名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点では、同位体関連研究に携わってきた広範な分野の研究者が結集・連携し、同位体科学の基盤研究分野（同位体分離・創製、同位体計測、同位体材料）から融合展開分野（環境・生命、文理情報）にわたる研究・教育を、総合的かつ有機的に行う。もって、学際性のきわめて高い同位体科学を飛躍的に発展させ、社会に還元し得る成果をあげることをめざす。拠点における協力を真に実のあるものにするため、上記2分野5部門からなる同位体科学バーチャル・ラボラトリを設置する。国内外の大学・研究機関との協力・共同研究も積極的に推進する。さらに、「同位体科学国際シンポジウム」を主催し、情報発信を行うと同時に異分野間の研究者の交流を促進する。若手研究助成プログラムを実施し、若手研究者の創造性や自主性を養う。同位体科学に関する体系化した講義や最先端の研究への参加を通して、同位体科学および学際融合分野の素養を持った若手研究者を育てる。また、同位体科学の教科書を執筆・出版する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>大学としての長期的な支援体制、若手研究者育成計画等がしっかりと構想されている。広範な分野の同位体関連研究者が集まり、環境・生命、文理情報分野への同位体応用を図りつつ同位体科学という学際的な拠点の形成を目指す計画はユニークであり、世界的な拠点になることが期待される。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	京都大学	整理番号	J - 2
拠点のプログラム名称	ゲノム科学の知的情報基盤・研究拠点形成		
中核となる専攻等名	化学研究所バイオインフォマティクスセンター		
事業推進担当者	(リダー) 金久 實 外13名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>ゲノム科学は、ゲノムの情報から細胞・個体・生態系レベルでの高次生命現象の全体像を明らかにしていく、21世紀の新しい生命科学である。その中核となるのがバイオインフォマティクスで、個々の部品（遺伝子・分子）の集まりから生命の情報システムを再構築する概念と方法論が開発されてきた。これからのゲノム科学においては、とくに医療や産業への応用を目指したゲノム科学においては、個体や生態系を複雑な情報システムとしてとらえ、システムと環境との相互作用の観点から、ヒトの健康や地球環境の保全を考えていく必要がある。本拠点ではそのために、生命科学と情報科学の融合はもちろん、物理科学と融合したアプローチ、化学情報との融合、さらには広範な知識のコンピュータ化を行い、創薬科学など応用ゲノム科学の知的情報基盤を形成し、バイオインフォマティクスの学際研究教育拠点を形成する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>生命科学を中心に諸科学を融合させ、ゲノム科学の知的情報基盤とバイオインフォマティクスの学際研究教育拠点の形成を目指す重要な提案であり、その研究教育レベルはすでに世界水準にあるものと認められる。基盤となる創薬科学からより学際的な方向に発展することによって、世界水準の長期的な維持・強化に加え、バイオインフォマティクスにおける層の厚い人材の養成が期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	京都大学	整理番号	J - 3
拠点のプログラム名称	微生物機能の戦略的活用による生産基盤拠点		
中核となる専攻等名	農学研究科応用生命科学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 清水 昌 外18名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>21世紀の世界的課題である環境保全、資源循環、脱石油の実現に向け、微生物機能を活用した省エネルギー・環境調和型物質生産システムを構築する。この目的のため、我が国が世界をリードしている応用微生物学を基盤とした国際的研究教育拠点を形成する。日本の多様な自然環境に起因する豊富な微生物資源に立脚した微生物機能探索・開発技術は、我が国独自のものであり、特に京都大学農学研究科は世界をリードしてきた。その実績に基づく拠点研究・教育活動は、国内外の産業界との強力な連携のもとに遂行され、微生物機能探索の基礎から開発・産業化までを一貫して行うものであり、化学、生物学、工学、食料科学、環境科学などの多彩な知識・技術を微生物機能開発に集約する学際・複合研究である。さらに、研究開発の現場における実地教育を軸とする大学院教育を通して、産学連携・国際協力の実際を熟知し、微生物機能利用技術を多様な分野へと展開できる研究者の育成を図る。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>現在、研究実績は概ね世界水準にあると認められる。今後、一層の努力により従来から言われている伝統的な有用微生物の分離方法の先を行く新しい技術を開発し、優れた実績をあげ、世界最高水準の拠点形成を目指すことを期待する。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	京都大学	整理番号	J - 4
拠点のプログラム名称	東アジア世界の人文情報学研究教育拠点		
中核となる専攻等名	人文科学研究所		
事業推進担当者	(リダー) 高田 時雄 外12名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>東アジア諸国は長期にわたり豊かな漢字文化を育んできたが、それを体現してきた東アジアの伝統的人文学は21世紀の情報化社会において大きなチャレンジを受けている。新しい情報化された世界においても十全に伝統を保持し、世界文化の重要な一翼を担い新たな発展を目指すためには、東アジア人文学を情報学的基盤によって再編成することが不可欠である。そのため京都大学における東洋学研究の長い歴史と輝かしい伝統を基礎としながら、最新の技術を駆使して漢字文化の情報化を推進するとともに、漢字を根幹とする東アジア言語文化の徹底した整理を試み、そのトータルな継承発展を目標とする学際領域としての東アジア人文情報学の拠点を形成する。さらにこの分野を担う人文情報学の人材を長期にわたって確保していくため、外国機関との提携を基礎に、海外拠点や国際的セミナーの開催を通じて、若手研究者の育成を図り、東アジア規模での人文情報学的ネットワークを構築する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>情報科学とも人文科学とも違う新たな学際領域「東アジア人文情報学」として漢字文化圏における人文学を再構築するという明確な目標をもつ研究教育拠点になることを期待する。中国学の伝統の上に、漢字文化の継承と発展をうながすナリッジベースの構築、新しい方法論の開発普及、この分野での人材養成に期待する。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	岡山大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	循環型社会への戦略的廃棄物マネジメント		
中核となる専攻等名	自然科学研究科地球・環境システム科学専攻		
事業推進担当者	(リーダー)田中 勝 外14名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>持続可能な社会，すなわち，循環型社会の構築に向けて資源保全効率，環境保全効率，経済効率を考慮して戦略的に廃棄物マネジメントを行うための研究や教育を行う拠点を岡山大学に形成する。研究としては，廃棄物マネジメント方式の評価選定手法として有力な廃棄物ライフサイクルアセスメント手法 (Waste Life Cycle Assessment: WLCA) や，それに必要な廃棄物の有害性評価，再生品の安全性評価手法の開発とリサイクル等資源保全技術，環境負荷削減技術および廃棄物処理技術の開発を行う。具体的には，廃棄物マネジメント研究センターの設置と大学院における廃棄物学専攻の拡充を図り，廃棄物マネジメントの 計画ツールの開発， 安全保障システムの開発， 減量，再使用，再生利用の 3 R 技術と適正処理処分技術を開発集積， 戦略的マネジメントに係わる人材の養成を行い，日本のみならず，アジア，環太平洋地域の廃棄物マネジメントに関する研究教育拠点とする。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>リーダーの意欲と大学全体の強い支援のもとで、アジアの廃棄物マネジメント学の拠点形成が計画されており、評価できる。廃棄物学から循環型社会学に向けた新しい展開を期待したい。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	広島大学	整理番号	J - 2
拠点のプログラム名称	社会的環境管理能力の形成と国際協力拠点		
中核となる専攻等名	国際協力研究科開発科学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 松岡 俊二 外14名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点形成計画は、国際協力の主要な分野である国際環境協力を対象とし、社会的環境管理能力という新たなコンセプトをモデル化することにより、新たな研究教育領域「国際環境協力学」を構築する。具体的には、アジア地域における環境問題の技術的アセスメントと社会経済的アセスメントを通じた政策研究により、社会的環境管理能力の発展指標と形成モデルを解明し、途上国における社会的能力の形成を支援する国際環境協力のあり方を提言する。ここで、社会的環境管理能力とは政府・企業・市民および中央・地方関係から形成される社会環境管理システムの稼働能力である。本拠点は、日本とアジアを中心とした諸外国の大学・研究機関と同時に、政府・企業・市民組織といった実務機関との連携により、国際環境協力プロジェクト研究センターを組織し、実践的・行動的知識の創出を可能とする。また、こうしたネットワークにより社会的環境管理システム教育コースを設置し、国際協力人材や若手研究者の持続的育成を図る。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>社会的環境管理能力を高めることを目的とした国際環境協力学の構築は特徴的であり、今後のわが国の国際貢献の方向に合致したものである。環境国際協力のあり方を学術の場で冷静に評価できることをめざして、学術・教育の拠点が形成されることを期待する。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	徳島大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	ストレス制御をめざす栄養科学		
中核となる専攻等名	栄養学研究科栄養学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 武田 英二 外8名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>社会構造や生活環境の変化に伴って現代人はストレスが増大しており、21世紀の栄養学分野が果たすべき課題は、ストレスによる「こころ」と「からだ」の異常に対応できる“食”を通じた栄養予防医学の展開と確立である。徳島大学では医・歯・薬・栄養学研究科を融合した生命科学系統合大学院を設立し、機能性食品評価システムを構築する将来構想を掲げている。「ストレス制御をめざす栄養科学」の臨床への橋渡し研究を遂行する本COE拠点では、1) ストレス関連疾患の遺伝子・タンパク質発現プロファイリング、クラスター解析、及びバイオフィーマティクスによる疾患特異的バイオマーカーの同定とその検出システムの開発、2) 抗ストレスのシーズ食品及び化合物の代謝・生体反応・安全性評価、有効成分の分子設計・合成、を通じた抗ストレス食品の開発、3) 抗ストレス食品のヒトでの機能解析・評価、テーラーメイド栄養管理法の確立、を実施する。さらに、競争的環境の中で将来のストレス栄養科学研究分野を担う若手研究者を育成する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>社会や生活環境の変化に伴うストレスの増加という現代の重要な問題について、ストレス科学、食品機能学、代謝学、分子生物学などの学際的融合により、ストレス栄養科学の拠点を形成するという企画のユニークさが評価される。ストレスの客観的評価法を確立し、抗ストレス高次機能食品の開発研究と教育を行うことを期待する。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	九州芸術工科大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点		
中核となる専攻等名	芸術工学研究科芸術工学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 栃原 裕 外18名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>我々の生活は、近年急速に人工環境に依存する度合いを強めている。しかし、利便性や経済性が優先されるあまり人間本来の感覚特性が軽視されることが多く、例えば、人工照明が人間の生体リズムを乱したり、映像、音響の乱用が神経障害、聴覚障害等をひき起こしたりするなどの問題が生じている。“芸術工学”の理念である“技術の人間化”を標榜する本学は、このような問題に取り組むに適した学際的な研究環境を整えており、人間の生理的・心理的感覚特性に基づいた人工環境を創造するための世界的な研究教育拠点を形成する。具体的には、視覚、聴覚、嗅覚、温熱感覚、体性感覚などについて、「環境生理学」、「知覚心理学」の立場から知見を統合し、それに基づいて、照明、映像、音響、空調、建築物などに関する「感性デザイン」を実施する。これを通して更に、人工環境の総合評価を行い、乳幼児、高齢者、障害者にも配慮した人工環境デザインに関する指針を確立する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>実験研究を基礎にして人間の感覚特性を総合的に評価し、人工環境デザインに適用する試みは特徴的であり、今までの実績や大学の全面的支援も十分である。海外拠点との連携をさらに進め、世界的研究教育拠点になることを期待する。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	九州工業大学	整理番号	J - 3
拠点のプログラム名称	生物とロボットが織りなす脳情報工学の世界		
中核となる専攻等名	生命体工学研究科脳情報専攻		
事業推進担当者	(リダー) 山川 烈 外10名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点は、von Neumannの蓄積プログラム方式に準拠した従来の計算機科学の殻を破り、生命体の脳や神経系の情報処理機能およびその発現行動に学んで、全く新しい情報処理パラダイムを創製しようとするものである。すなわち、外界からインプットされた情報を、予め与えられたプログラムに従って処理をするのではなく、生物が日々の生命活動の中で行っているように、自ら外界環境へ働きかけ、それに対する外界からの反応を検知し処理をするという、「自己と環境との相互作用」により自己組織的に構築されていく情報処理システムを本拠点の研究対象とする。本拠点の網羅する学問分野および研究領域は極めて広く、かつ学際的であり、5年後には新しい学問領域「脳情報工学」の創出も期待できる。本拠点が深く関係する学問分野としては、脳科学および神経科学、心理学、人類動態学、言語科学、電気・電子工学、計算機科学、ロボット工学などである。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>大学の将来構想において本拠点を重要基盤と位置づけ、本プログラムに対する支援体制を充実させていることは高く評価できる。脳情報工学の構築に必要な多様な分野での十分なポテンシャルを備え、小規模ながら先鋭化した拠点形成が可能である。また、博士前期後期課程における独創的な一貫教育制度を取り入れた教育構想には高水準の若手人材の育成を期待したい。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	国際基督教大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	「平和・安全・共生」研究教育の形成と展開		
中核となる専攻等名	行政学研究科行政学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 村上 陽一郎 外20名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本プログラムは、学際複合的視点から「広域平和研究」の主題で世界拠点の形成を目指す。三つのプロジェクトから構成されている。1)「不安な社会」における「平和・安全・共生」研究教育、2) 将来世代の「平和・安全・共生」研究教育のための世界ネットワークの形成および展開、3)「平和・安全・共生」の思想と運動、法制と政策に関する研究教育。純粋な意味での平和研究に加えて、安全な食糧・生活環境・医療・科学技術や紛争解決のあり方、自然環境との共生型の社会や企業の探究、ジェンダー間や異民族間の和解共生のあり方など、多種多様な課題を具体的に追究する。本学が構築してきた国内および世界各地の大学や研究機関とのネットワークを駆使して、「平和・安全・共生」研究教育の拠点(ハブ)形成を行い、世界平和のメッセージを発信していきたい。「人間の安全保障」と「共生」は本プログラム全体を統合する中枢的理念である。「広域平和研究」のグランドセオリーを追究すると同時に、具体的な政策提言を行っていく。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>本拠点形成に当り大学としての支援体制も整っている。また、国際的な研究ネットワークについても、既に強固なものが構築されている。本計画により、3つのプロジェクトを統合する「グランドセオリーの構築」が成されれば、学問的貢献が大きいものと期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	東洋大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	新機能微生物科学とナノテクノロジーの融合		
中核となる専攻等名	バイオ・ナノエレクトロニクス研究センター		
事業推進担当者	(リダー)前川 透 外20名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>1. バイオ・ナノテクノロジー融合研究をさらに推進する。特に次の、A カーボン・ナノチューブ、DNA系を利用した次世代バイオ・ナノシステムの構築 B 高効率バイオ・ナノ分析システムの開発に重点を置く。2. 既に海外5大学と共同研究を行っており、更に海外研究機関との共同研究を発展させ、新規先端分野の研究を遂行し、バイオ・ナノテクノロジー融合研究の世界的拠点とする。3. 先端的テーマを中心とした国際シンポジウム・セミナーを定期的に企画・開催し、本センターの研究レベルを向上させる。また、研究発表等により若手研究者の育成を図る。4. 従来推進してきた、極限環境微生物の高効率遺伝子ライブラリーの構築とナノ・シリコン・デバイスの研究をさらに発展させる。得られた研究成果を基礎として、産業界との共同研究を推進し、新たな産業の創出を図る。5. 本センターを基盤とした新大学院研究教育システムを構築し、バイオ・ナノテクノロジーを専門とする若手研究者を育成する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>研究者個人の実績と高いポテンシャルに加えて、若手研究者の積極的参加は評価できる。ナノ科学と生命科学を取り込む計画は未だ萌芽的現状にあり、解決すべき種々の課題を抱えている。本プログラムは対象を微生物にしぼって取り組もうとするユニークな意欲的な計画であり、拠点計画の具体的戦略において、なお検討すべき点を多く含んでいるものの、計画と目的において世界水準を達成し得る可能性があるものと認める。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	日本大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	環境適応生物を活用する環境修復技術の開発		
中核となる専攻等名	生物資源科学研究科生物環境科学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 佐々木 恵彦 外9名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点計画においては、国外の研究機関との緊密な連携と共同研究により、「現地」の劣化した自然環境、特に、当初は酸性硫酸塩土壌地帯に適応する生物を探索するフィールド研究を行う。そこで得られた生物の環境適応機能の基礎科学的な解析を行う室内実験研究を経て、その特性を利用した現地適応フィールド研究へ展開させる。こうした自然科学的な環境修復研究に対応して、環境修復に関する社会科学的評価研究を展開させ、広角的な立場で環境修復研究教育を進める。本プログラムは、生物環境科学研究センター（生物環境科学専攻）を基幹とし、生物資源科学研究科の各専攻を横断的に連携した研究教育体制を組むとともに、学内公募によって若手研究者を参加させる一方、本COEプロジェクトを通して大学院の充実や学生の経済的負担の軽減、他大学院学生の研修受入れ等を積極的に実施する。さらに、国内の大学・研究機関との研究交流によって一層の活性化を図る。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>大学の将来構想、本プログラムに対する支援体制ともに評価できる。従来の研究科間の相互乗り入れによる人的資源の確保にも努めている。拠点形成計画は緊急かつ必要性を十分に意識したものであり、世界的水準の拠点になることが期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	神奈川大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	人類文化研究のための非文字資料の体系化		
中核となる専攻等名	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 福田 アジオ 外18名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点形成計画は、日本常民文化研究所の70年にわたる調査研究の蓄積と新たな構想の下に設置された歴史民俗資料学研究科の研究者養成の実績を基礎に、文字に表現されない人間諸活動の資料化とその体系化を行うことで人類文化研究の新たな地平を開き世界的に貢献することを目的とする。併せて非文字資料を解析する若手研究者の育成はもちろんのこと、非文字資料に専ら依拠する博物館専門職員（学芸員）等の高度専門教育の推進を図る。人間諸活動の表現を 図像、 身体技法と感性、 環境と景観の三つに大きく分け、それぞれの資料化の方法と解析方法を研究し実践すると共に、各資料群のデータを広く世界に提供する。さらに、資料の相互関係を確定し、文化情報発信の新技术を開発し実験を行う。その成果を基礎に、世界的な非文字資料研究センターとして本拠点が永く学術的貢献を果たし、研究と教育を融合し国際的に開かれた大学を追求する本学の基本方針を具体化することを期している。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>非文字資料の収集・整理・体系化は、日本常民文化研究所とわが国唯一の歴史民俗資料学専攻大学院をもつ神奈川大学が拠点となるのが最もふさわしい。非文字資料を体系化する普遍的な方法は未だ確立されておらず、きわめて独創的な試みであり、その成果が期待される。メンバーには優れた研究実績を備えた人材がそろっており、研究教育を遂行するうえでも十分にポテンシャルがある。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	同志社大学	整理番号	J - 2
拠点のプログラム名称	一神教の学際的研究		
中核となる専攻等名	神学研究科歴史神学専攻		
事業推進担当者	(リダー) 森 孝一 外16名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>本拠点は「一神教学際研究センター」を基盤にして、世界にも先例のない、総合的かつ学際的な一神教研究を進める。そのために本拠点は、文明の共存と安全保障の実現を焦点としながら、キリスト教神学、イスラーム学、ユダヤ教研究、比較宗教学、地域研究、国際政治学、科学史、比較文明論、アラビア語・ヘブライ語教育をカバーする。また、本プログラムの成果を英語・アラビア語・日本語で発信することによって、グローバルな研究教育ネットワークを形成する。研究面に関しては、「9.11」テロ事件以降、ユダヤ・キリスト教世界とイスラーム世界との文明の衝突状況が顕在化しつつある中で、一神教世界の構造と論理を析出し、対話と共存の道を模索するとともに、平和形成のための学問的・政策的提言を行うことを目的とする。また教育面に関しては、宗教・政治・文化の教養を学際的に学ぶことにより、現代世界の複雑な政治状況や紛争を正しく把握し、問題解決の道筋を示すことのできる「文明の共存のためのスペシャリスト」を育成することを目的とする。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>研究には優れた特徴があり、またリーダーの意欲は高く、さらに大学全体としての強い支援も十分で、評価できる。海外拠点との関係に関する構想を大いに進め、世界的研究拠点となることが期待できる。</p>			

採択拠点の拠点形成概要及び採択理由

【分野名：学際、複合、新領域】

大 学 名	近畿大学	整理番号	J - 1
拠点のプログラム名称	クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点		
中核となる専攻等名	水産研究所		
事業推進担当者	(リダー)熊井 英水 外19名		
<p>(拠点形成の概要)</p> <p>クロマグロ等の有用魚類の高度養殖技術に関する開発研究及び、魚類養殖産業の世界的な拡大を支援・協力する最高水準の研究教育拠点を形成する。拠点となる水産研究所は、クロマグロの完全養殖に世界で初めて成功し、魚類増養殖の研究教育を産業規模で行ってきた唯一無二の機関である。また、農学研究科水産学専攻は魚類増養殖の基礎的知見を集積してその発展を支えてきた実績を持つ。本計画ではクロマグロ等の完全養殖仔稚魚・親魚を用いて、成育、成熟、産卵などに関する生理生化学・育種学的検討と種苗量産技術、実用配合飼料と環境保全対策、肉質・安全性、放流と資源動態及び生産流通調査と本拠点研究の波及効果などについて研究・検証する。本専攻の学生、海外からの多くのポスドクや研究者を加えた充実した研究組織を通して、世界の養殖産業の発展や生物資源管理に貢献する有為な情報と人材を発信する。</p>			
<p>(採択理由)</p> <p>クロマグロ等の養殖産業支援型拠点の形成という極めてユニークな研究であり、またリーダーの意欲は高く、そのうえ大学全体としての強い支援も十分に評価できる。世界初のクロマグロの養殖の成功は世界的研究拠点となることを十分に期待させる。そのうえ、若手研究者の育成にける意気込みも認められた。</p>			